

## William Morris の Past Utopia

宮 井 敏

Friedrich Engels は『空想より科学へ』において、「三人の偉大な空想家」<sup>1</sup>をあげ、彼等の空想的社会主義が科学的社会主義の成立にいかに関与したかを精密に分析してみせた。H. Marcuse は『ユートピアの終焉』<sup>2</sup>において、そうした科学的社会主義なるものが果してどれほど「科学的」であるのか、その硬直化、形骸化を打ち破り、もう一度社会主義の原義に戻って洗い直すために「科学から空想へ」もどる事を提案した。そもそも何が「社会主義」であるのかは古来果てしない議論のあるところであり、Werner Sombart によれば105種類あると云い、パリの *Les Temps* 紙のアンケート調査によれば200余ともいい、要するに社会主義の種類は自ら社会主義者と名乗る人の数だけあらうとさえ云われている。その中でも19世紀ヨーロッパにおいていわゆる空想的社会主義者と呼ばれた人達の言説は今日さまざまな角度からの再検討の対象となっており、その事はとりもなおさず、Marx, Engels によりそれらの諸説を土台として大きく集約統合せしめられた科学的社会主義なるものが、さまざまな国家的実験の結果、今あらたな批判の対象となっており、思想における権威主義、教条主義の衰退とともに一からの洗い直しが強力にすすめられていることを意味している。

ところで社会主義思想が自由・平等を目指す社会変革のプランであるかぎり、或程度ユートピア思想と重なって来るのは当然の事であろう。いま社会主義の発展段階を、1. 白紙に理想像を描く作業、2. その理想像を規範として現実社会を批判する過程、3. その理想を実現するためのプラン、とと

らえてみると、多くの utopians にとってはこの三つの段階全部が、すべての utopians にとってははじめ二つの steps までがそのまま彼等の思想の根底となるわけである。産業革命以後の utopias のほとんどが程度の差こそあれ socialistic な factor を持つゆえんである。

もっとも自由と平等を目指す努力はそれ自身なにもそれほど強い社会的自覚はなくともほとんどの人間の本能に根ざす行為であり、egocentric な motivation から人々は本能的にそれを望むものである。従っていつの時代であろうとも理想とする未来社会を自由奔放に描かせれば何人なりとも自由で平等な社会を描く筈である。アテネの貴族であった Plato であろうと、ヘンリー八世、ジェームズ一世の大法官であった More, Bacon であろうと、その強い秩序感覚はさておき、ともかくも自由・平等の社会をみごとに描いてみせるというのは実にこのためであろうとおもわれる。

ところで、“Communist More” とか “Plato の理想国における communism” とか云う云い方はしても、彼等を空想的社会主義者と呼ばないのは時代や境遇のせいもあって彼等に社会主義社会実現のための具体的努力がなかったためなのであるが、これに反して19世紀の utopian socialists たちはそのための何等かの実践活動を当然の使命としており、又事実その多くが実験的ユートピアを各地に建設しさえしているのである。

さて William Morris は1856年 Oxford 大学を卒えて工芸家、詩人としての生涯をスタートするのであるが、1876年の東方問題を契機として急速に社会的関心を深め、1883年の the Democratic Federation 加盟後は名実ともに socialist として活動をはじめた事になり、数百回にのぼる各地での講演や、Socialist League の機関誌 *The Commonweal* を通じて活発に発言してゆくのである。そしてこの機関誌に連載された *A Dream of John Ball* (1886年11月から87年1月まで) と *News from Nowhere* (1890年1月から同年10月まで) の二作でもって長く19世紀を代表する Utopian として記憶されるようになるのであるが、これらの作品は “utopia” という言葉の造語者

Thomas More 以来多くの utopia を生み出して来たイギリス・ユートピア文学の中でも代表的なものとされているのである。作者 Morris はその意味では伝統的なイギリス・ユートピアン系の系譜に連なる一方、実践社会主義者としての多彩な活動を行っており、utopia を書きはするが実現への努力はしない utopians と、実践はするがユートピア文学を書かない utopian socialists のいづれでもないユニークな立場を占めているといえる。

この事は又 Morris の作品にほとんど諷刺的要素のない事の説明にもなる。よく知られているように Thomas More の *Utopia* の第一部はヘンリー八世治下のイギリスの状況をことこまかに論じているが、非惨な現実を暴露し暴政を批判するのに作者は屢々諷刺の手法にたよらざるを得なかった。Karl Marx が引用した（マルクス『資本論』、エンゲルス編、向坂逸郎訳、岩波文庫第三巻、第七篇第二四章第二節、「農村住民からの収奪」）ことで有名な

“Your sheep,” I answered, “which are usually so tame and so cheaply fed, begin now, according to report, to be so greedy and wild that they devour human being themselves and devastate and depopulate fields, houses and towns.”<sup>3</sup>

という箇所のごときはその一例であろう。この事は第二部にひきつづいて第一部が書かれた 1516 年当時 More がかゝっていた政治状況と無縁ではなく、奔放に己の想像力を展開する自由を当時の彼がもたなかった事を示すものであるが、反面彼が社会変革のための手段を現実にもち得ていたならば少くとも諷刺の手法にたよることはなかったものとおもわれる。けだし諷刺とは非力を前提とする自己主張にもとづくものだからである。もとより下院議員にして高名なる弁護士、王の外交使節、のちの大法官たるサー・トマスを非力というのではない。国内で最高の顯職を極めながらも後年の殉教の死が示す程に、体制の頂点にあってなお己の理想の実現のためには非力をかこっていたという事である。Robert Bolt 作るところの *A Man for All Seasons*<sup>4</sup>

がいみじくもえがき出す More の姿はこうした彼の内部の理想家と実務家の相剋をまざまざとうつし出しているのである。

これに反して Morris の場合は一つには気質的な問題もあって終始物を satirize することなく真正面から直接に批判している。元來彼の utopias は narrative な要素が少なく、はっきりした問題意識をふまえた polemic な種類のものであるが、彼が社会変革ののろしをかゝげて socialist として活躍している間は組織参加出来ぬ苛立ちや非力をなげく悲しみは少なかった事であろうとおもわれる。つまり Morris の場合は utopian としては問題提起者であり、socialist としては問題解決者であろうとした珍しい例だといえよう。

ここに Morris の design した Democratic Federation の会員証がある<sup>5</sup>。上部に Liberty, Equality, Fraternity, とあり、中央の会名をめぐって Educate, Agitate, Organise と彫られている。後者はさしづめ研修し、情宜し、オルグしようという行動綱領であろうが、前者はフランス革命と同じ理念が社会主義社会のモットーとしてかゝげられているものであろう。ところでこの三つの理念はほとんどすべての socialists がかゝげるものであるが、人それぞれによってどの項目にアクセントをおくか、微妙なちがいがあろうである。自由をとりわけ強く主張する socialist は何よりも束縛を嫌い、己の主体性を打出し、超越的権威を打倒しようとする。平等を第一のモットーにおく人は前者よりも他を意識する事が強く、しばしば不平不満の徒であり、もっとも過激な言動に走りやすい。そしてさきにふれたごとく、この二者は egocentric な motivation から生まれて来る要求であるといえるが、最後の友愛を至高のものとする人は、それが利他的動機から発するものであるだけに穏健にして寛容なる人物が当然多いわけである。さて Morris は一切の国家統制を拒否し、Iceland の classless society にあこがれ、John Ball と共に fellowship を唱道するという、三つの理念の均衡をほどよく保ち乍ら、思想において radical であっても心情において hysterical になることなく、

徹底して反権威主義的であったが、同時に他者に対しても寛大であり、独善、偏狭におちいらず、被害者意識をもたず、運動家にありがちなすべての欠点からのがれているのである。ここにも又 socialist としての Morris のユニークさが見られるのである。

こうしたユニークな人物のえがくユートピアは当然の事ながらユニークなユートピアでなければならない。即ち *A Dream of John Ball* はユートピア文学の中でもその願望時間を過去にもとめた珍しい作品といえる。Mark Twain は時代を1300年ばかり逆行させて Arthur 大王の宮廷に工場主の Yankee を登場させて大あはれするという話をつくり上げたが (*A Connecticut Yankee in King Arthur's Court* 1889), 物語は民主主義社会と科学技術を信奉するアメリカ人が、封建社会の前近代性や階級社会の不合理性、非科学的な迷信などを徹底的にこきおろすという痛烈な諷刺の文学となっではいるが、utopia 的要素にはかけている。従って願望時間を過去の特定の時期に設定した utopia というものは外に類例を見ない構想であるとはいえよう。

大体、Morris は少年の頃からの中世社会に対する憧憬をそのまま育てて、Oxford 大学で中世史を学び Chaucer を愛読し、次第に発展して19世紀ロマン派詩人特有の medievalism から遂には中世社会に utopia の姿を見るほどとなったのである。こうした中世礼讃が従来ややともすれば誤解されて、回顧趣味であるとか、escapism であるとか云われてきたのであるが、Morris の真意はさにあらず、この作品によって過去と現在をつなぐ歴史の流れを把握し、理想的過去を尺度として誤まれる現在を正し、さらには4年後にかかれた *News from Nowhere* によって現在と未来をつなぐ歴史の動きを予測し、あしき現在を正しき未来に向けて改革してゆくというプランを立て、補完の関係に立つこの二つの utopias —— かりに Past Utopia と Future Utopia と名付けたが——によって歴史の弁証法的発展の法測を示そうとしたのである。

実は Morris の utopia は二つながら断片的で首尾結構相整うておらず、

又空想社会としての detail に欠けるという非難があるのであるが、それは utopia の成立過程をも含めた時間的経過の上に立つ utopia としては或る意味では当然の事であり、超時間的に静止し、かつそれ自身完結している utopia とは根本的にちがっているからなのである。従って SF 的な細部を示すことは作者の意図にとっては必ずしも必要なことではなく、むしろ擬似科学性を装った興味本位の science fiction よりば、人間社会の運動法則を把握して、これに沿って理想社会を建設しようとするこれらの utopia のほうが本来的により科学的であるともいえよう。この点では Lewis Mumford が *The Story of Utopias*<sup>6</sup> の中で utopia を二つに分け、我々が運命のゆえに苦しまねばならぬ苦悩や欲求不満から直ちに解放してくれる機能をもつものを逃避の utopia とし、将来において人間解放の条件をととのえてくれるものを再建の utopia とし (Chap. 1. Sec. 3), Morris のそれを前者に属するものとしている (同章, Sec. 4) のは全き誤解といえよう。

尤も Morris の utopias の意味なり彼の社会主義なりのわかりにくさを考えるとこうした誤解が時に生ずるのも故なしとしない。元来社会改革を目指す実践家というものは Engels, Marx であろうと Morris であろうと論争形式で自己の思想をのべる事が多く、従ってその時々相手のによって、その場の状況によって用語なり論旨なりが変わる事が有り、包括的な思想体系としての首尾一貫した整理が時に困難を来たす場合がある。それでもまだ Morris の場合はさきにのべたように他人の異説に寛大で、むしろさまざまな考えを清濁合せ吞んで来た風があるのであるが、ブルードンの『貧困の哲学』に対する激烈な反論であるマルクスの『哲学の貧困』や、デューリングに対する手きびしい反論である『反デューリング論』、及びその要旨たる『空想より科学へ』などの用語や表現というものは戦斗的であるが故に必要な以上にはげしすぎる気味があり、そのためにいろいろな解釈が生まれる事になったものであろう。

今一つの事は、イギリス史上およそ六世紀から十五世紀にかけての1000

年に及ぶ Middle Ages のどの時期を、またどの面をとり上げるかによって話はずい分とくい違って来るといふ事である。近年中世英国史は急速に研究がすすんで、さまざまな資料や見解が次々と新たに出されているが、少くとも Morris が Oxford で学んだ頃の中世史研究にはかなりの制約があった筈である。従ってそうした判断材料の不備もあったであろうという事で人々は余計に Morris が中世社会を美化しすぎると非難するわけである。

A. Huxley は云う。「社会関係論の研究者がその著述を飾るために用いる中世社会の叙情的記述のロマンティックな誤りたるや誠におどろくべきものがある。彼等は“ギルドや荘園の成員は終生保護され、平和と静寂が与えられていた”という。何から守られていたのかと私は問いたい。おえら方の無慈悲な迫害からではない事はたしかである。そしてかの平和と静寂なるものと平行して中世全体を通じて、おそるべき慢性の欲求不満と悲慘と、身分上の昇進は一切みとめられず、又土地にしばりつけられた人々の水平の移動も滅多に許されない階級社会に対する憤懣が渦巻いていたのである」。( *Brave New World Revisited*, Chap. 3. “Overorganization” )<sup>7</sup>

この Huxley の指摘はその限りにおいて正しい。だが Morris がえがくのが豪毅朴訥な独立心のつよい農民であり、貧乏も悲慘も出て来ない村落であるという事は、中世社会全体からの Morris の主観的抜萃ではなくて、彼の所期の目的にそう客観的選択であったというべきであろう。それに従って彼は時期としては農村経済のひずみが次第に強くなり、絶対王政が登場する直前の、諸侯豪族による貴族政治のために王権が衰微していた Plantagenet 王朝末期をえらんだのであり、事件としてはそうした農村社会における蓄積した諸矛盾の暴力的解決としての農民一揆をとり上げたのであった。

願望時間の問題はそれとして、願望空間としては作者ははじめから架空の場所をえらぶ気はなかった。二つの utopias の舞台のいずれもが London とその周辺部とされているのである。筆者はかつて、風刺文学であろうとユートピア文学であろうと作家が空想社会をえがく時は、時間か空間かいづ

れか一つの次元のみを移動せしめてそれを構築するものだと指摘した事がある<sup>8</sup>。けだし utopia には連結と断絶の二面があり、現実社会と半ば連結し半ば断絶するという関係は時代か場所かいずれか一つの変更に限られるからと云うのであった。まして地理上の発見の相ついだルネサンス期の utopia とは異なり、具体的な変革のプランの提示である産業革命以降のイギリスの utopia では舞台は London 以外に移動させよう様もなかったわけである。

さていよいよ題材とされた1381年の Wat Tyler と John Ball の農民一揆の問題である。王は Plantagenet 王朝最後の幼王 Richard 二世であり補佐は圧制ゆえに農民の怨みを買った Lancaster 公, John of Gaunt。すでに対仏百年戦争と腺ペストの流行で労働人口は減少し従って労賃が高騰するのに対して、省力化して人件費総額を抑え、資本投下して acre 当りの収益率を高め、相まって生産性の向上をはかるほどに経済が発達していない時代の事とて、ただただ The Statutes of Labourers によって賃金を凍結し、あまつさえ新たに人头税を徴収しようとしたため、エセックス、ケント両州で農民の反乱がおこり、各地で政府の末端機関が襲撃され、ついにロンドンに入城して、一時は王に要求をのませるが陰謀のためにリーダーを殺されて一味は分散してしまうという悲劇的な農民一揆の挫折の物語が下敷となっている。しかし乍ら Morris は正確にこうした事件の経過を追っているわけではなく、彼の当初の plan の命ずるままにその悲惨な結末には全くふれずに、蜂起後の小戦闘における勝利のみを描いて暴動の話は終り、そのあと本論たる John Ball と「私」との間の過去と現在、或は14世紀と19世紀の比較、社会の歴史的発展についての議論でおわっているのである。

作者が形式的には十四世紀の William Langland の長詩 *Piers the Plowman* における dream-vision の形を踏襲している事は明らかであるが、より直接には Thomas Carlyle の *Past and Present* (1843) から大きく示唆をうけたであろう事は否定出来ない。Thomas Carlyle はこの作品に先立って1839年 *Chartism* においてチャーティスト運動をイギリスにおけるフランス革命と



見なし、労働者階級の不満を解消するためにも、社会改革を急がねばならぬことを説いていたのである。その後12世紀の一修道院の記録に胸打たれた彼は Saint Edmundsbury の修道院において平修道士であった Samson が不思議な神の御業によって修道院長となり、しかも平修道士時代には同僚が思いもしなかったような隠れたる才能を発揮して名修道院長となり、神聖なる労働を通じて神に仕え、数々の事蹟を残してゆくという話を、中心である第二巻に据え、これに先立つ第一巻の序言では19世紀初頭のイギリスの現状を分析し、過去と現在とを比較し、第三、第四巻においては労働が祈りであった修道院の生活と、労働が苦痛以外の何ものでもない近代労働者の悲惨な生活との対比において産業革命以後無為無策であったイギリスの労働問題を「産業隊長の構想」という具体的提案によって解決しようと試みたのである。こうした考え方が Ruskin を通じて Morris の労働観に影響を与えた事は明らかであるが、同時にこの作品の前年に書かれた *Hero and Hero-worship* と共に、混迷をつづける卑小な現実を一気に解決して呉れる筈の英雄を待望する気持を Morris に起させ、Iceland 民話から取材した、*The Life and Death of Jason* (1867)、*The Earthly Paradise* (1868)、*Sigurd the Volsung* (1870) 等の作品を生み出す源となったのである。これらの作品はいづれも古代社会の英雄を扱っており、およそ英雄的でない当時の現実に対して間接的な批判を試みたわけであるが、また聖サムソンの英雄的な行為が行動する修業僧、戦う説教僧 John Ball の姿に投影していると見る事も出来よう。Carlyle のドイツ風の汎神論的理想主義は自由放任をかゝげるブルジョワ功利主義とは真向から対立するものであり、その非妥協的な批判のきびしさが Morris に資本主義社会の矛盾と戦うに際して大きな勇気を与えたものであり、ブルジョワの支配する社会の繁栄の陰にかくれた貧困とそれのもたらす悲惨と破壊の指摘はトーリー党寄りの姿勢ながら、反ブルジョワ、反功利主義を指向するものとしてエンゲルスが高い評価を与えたもののなのである。たゞエンゲルスも指摘するごとく<sup>11</sup> Carlyle の資本主義体制批判は今一步のと

ころで彼の保守的正義感の限界をこえる事がなかった。折角の鋭い批判があり乍ら民衆に対する強い不信感から彼は democracy を信用する事が出来ず、又経済分析を甚だ不得手としたために、膨大な貧困の真の原因をさぐる事が出来なかったわけである。その点で Morris は Ruskin からと同様、Carlyle からも非常に多くを学び乍ら知らずして師二人の限界をこえて前進して来たといえよう。

思うに、Morris が *A Dream of John Ball* において示そうとした事は二つの問題につきる。一つは fellowship の唱道であり、今一つは歴史発展の非連続性の確認であった。前者の fellowship の問題はさきにのべたフランス革命の際の三つのモットーの一つ fraternity の理念につながり、直接的には執筆当時に Morris がかゝっていた深刻な問題、すなわち社会主義諸団体内部のたえざる分裂抗争の対策がこゝに反映されてることである。又一つにはスイスにおけるジュラ連合 (Fédération Jurasienne) の影響が考えられる。これは山村の農民出身である時計職人達の団体で、バクーニン主義を奉じ、fellowship を前提とする各自の自由意志を最高の理念とするアナキストから成り Michael Bakunin を支持する有力な一派となっていたのである。ところがイギリスへ亡命する直前の Peter Kropotkin がスイスを訪れ、この山村の人達と生活を共にして、出ては耕し、入りては手仕事をするという半農半工の生活にいたく感銘をうけ、彼等との討論を通じて Fourier の “travail attrayant” (attractive work) の理論に磨きをかけ、その後彼等の総会であるジュラ会議でアナキストとしての最初のスピーチを行ない、ついでロンドン入りして Morris との親交を深めるに到るのである。つまり、fellowship により有機的に結ばれている成員全体が作業の最終段階まで直接参加する事によって、非人間的な極度の分業体制から生ずる疎外の悲惨を防ごうという“魅力ある労働”の考え方はこうして Kropotkin によっても又 Morris に伝えられ、次作 *News from Nowhere* において更に発展させられるのであった。

では大方の読者が失敗におわった事を知っている農民一揆の緒戦の勝利の

部分のみを取り上げる意味はどこにあったであろうか。Morris より100年おくれて生まれた Arnold Wesker は Morris の socialism に関する lecture の一部を巻頭にかゝげた *Their Very Own and Golden City* (1964, 初演 1966) の中で隠退寸前の労組オルグのベテラン、Jake Letham にこう語らせている<sup>9</sup>。

「敗北は問題じゃない。長い目で見りゃどんな敗北だってほんの一時的なものさ。今の人々がどう思うかは気にすることない。未来の連中が今をふり返って、誰か一人でも原則に従って行動したものがあったかどうか知りたい事だろうよ」。

又レーニンは1916年のアイルランドにおける復活祭蜂起によせてこう語っている。

「科学的な意味で盲動といえるのは蜂起の企てが陰謀家またはばかげた狂信者の一サークルのほかにはなにも明みに引き出さず、大衆のうちに何の共鳴も呼びおこさないようなばあいだけである」。

「時機を得ない、部分的な、分散した、したがって不首尾な革命運動の経験によってはじめて大衆は経験を獲得し、教訓を学びとり、力を集積し、自分たちの真の指導者、社会主義プロレタリアを見てとり、そうする事によって、個々のストライキ、全国的デモ、農民のあいだの爆発などが総攻撃の準備をととのえるであろう」。(自決に関する討論の総括)<sup>10</sup>

そしてもちろん Morris にとっても一時的敗北は問題ではなく、未経験からくる戦術の失敗も、情報不足から来る判断の誤りも、教育不足による意識の低さも大した問題ではなかったわけである。この *A Dream John Ball of The Commonwealth* への連載が終った1887年1月より10ヶ月後に Trafalgar Square における Bloody Sunday の暴動がおきるのであるが、目前におこる都市暴動の事実を知るに先立って、彼は John Ball の反乱の象徴的意義と問題提起の重要性に着目してこの story を組み立てたのであった。およそ蓄積した内部矛盾は暴力的解決を求めるし、体制の変革は平和的移行によっては

不可能であり、そうした歴史の非連続的發展が人類文明の運命を最終的には切り開いてゆくのだという確信が彼をしてこの utopia を書かしたものであろう。

## 注

- 1 エンゲルス『空想より科学へ』、大内兵衛訳、岩波文庫、第一章「空想的社会主義」。
- 2 H・マルクーゼ『ユートピアの終焉』、清水訳、合同出版、昭43。
- 3 *The Complete Works of St. Thomas More*, Vol. 4, ed. E. Surtz & T. H. Hexter (Yale Univ. Press, London & New Haven, 1965), p. 65
- 4 Robert Bolt: *A Man for All Seasons* (Heinemann, London, 1964)
- 5 小野二郎『ウィリアム・モリス』中公新書, No. 336, p. 163
- 6 Lewis Mumford: *The Story of Utopias* (The Viking Press, New York, 1950)
- 7 Aldous Huxley: *Brave New World Revisited* (Chatto & Windus, London, 1966)
- 8 拙論「イヴリン・ウォーの空想社会」, 同志社大学英語英文学研究, No. 2. 1971 Oct.
- 9 Arnold Wesker: *Their Very Own and Golden City* (Jonathan Cape, London, 1964) Act 1, Scene 5.
- 10 レーニン全集 第十卷 (大月書店, 東京, 1956) p. 416 & 419
- 11 「イギリスの状態」, 在マンチェスター, フリードリヒ・エンゲルス (トマス・カーライル「過去と現在」, ロンドン1843年), (マルクス・エンゲルス全集, 第一巻, 村田陽一訳, p. 570~p. 603.) 大月書店。

## William Morris's Past Utopia

by Bin Miyai

William Morris tried to create his utopia in the future society in his *Newe from Nowhere* (1880). Before writing this story of the idealized society, he tried to show how the utopias would be constructed through the serious endeavours by the people. In *A Dream of John Ball* (1878) he chose his idealized struggle of the people to get freedom from their masters in the agricultural society in the English Middle Ages. It was the Peasant's Revolt in Kent and Wessex in 1381 lead by Wat Tyler and John Ball. According to Morris's way of thinking, the idealized society would not be established unless the bloody revolution would happen and the old system of the society would be destroyed completely. So, in writing the Future Utopia in *News from Nowhere*, he had to show the way how the ideal society would be constructed, choosing the concrete time and space in the history of the English people. So, in a sense the latter would be a Past Utopia. But although this piece of work had been misunderstood as the nostalgia of the romantic poet, nowadays we do not think it to be the simple poetic short piece of work through Morris's mediaevalism. As we see in the later chapters of the work, the author is keenly looking for the future ideal society from the stage of peasants' bloody revolt in Kent near London. So we can say that *A Dream of John Ball* and *News from Nowhere* are not separate stories but all in one to create his utopia.